紀州藩で製作された銅人形について

――その監修者と近代における展示についての覚書――

加藤幸治

はじめに

筆者は人・物・情報の流通による新技術や知識の受容の過程でいかなる文化変化が起こるのかを、物質文化を通して研究することを一貫したテーマとしている。その研究の事例研究として、これまで郷土玩具や農山漁村の生産に用いる道具を対象に、方法論的検討を行ってきた[1]。そこでは、物質文化と文献史料、聞書きを総合的に用いて、歴史的展開を追跡することを試みてきた。現在取り組んでいることは、歴史的にさまざまな主体が所有しながら伝世してきた造形物を、文献の検討と実物資料の検討を通してその背景を明らかにし、新技術の知識の受容過程を描く試みである。

その研究素材として筆者が注目したのが等身大の人体模型、いわゆる銅人形とよばれるものである。銅人形は、気血が流れる経絡と鍼や灸を施す経穴とを、立体の人体模型に表現したものである。それは、経絡・経穴の知識の集成として、また漢方医術の人体観を具現化した作り物として、また教育と技術鍛錬の教材として製作された。

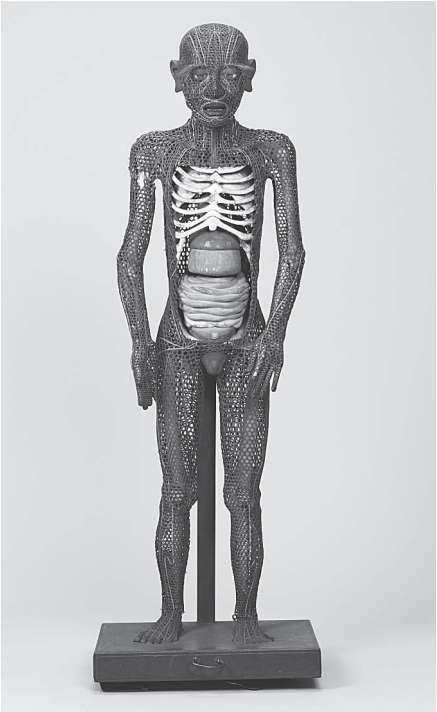
これまで銅人形は、単なる近世の医学教材の標本資料としか位置付けられてこなかった。すなわち、その研究においては、中国で発達した医学とその教育法と教材が、日本にどのような形で受容されたかに重点が置かれるが、ここには二つの視点が欠落している。ひとつは、当時の医学的知識を総動員して作られた個々の銅人形が、いかなる事情から製作が進められ、その製作がどのような政治的・文化的意義を持ったかというローカルな背景に対する歴史的視点である。もうひとつは、銅人形をはじめて製作した当時の工人は、どのような技術と工夫を凝らして、未知の銅人形制作に臨んだかという工芸史的視点である。筆者は、こうした問題意識で銅人形の調査を始めたが、本稿ではその基礎作業で断片的に明らかにしえた、紀州藩で製作された銅人形とその監修者の背景について報告する。

ところで、鍼灸による病気の治療は、もともと中国から我が国にもたらされた知識と技術であるが、江戸時代以降、庶民にも施術されるものとなった。江戸時代には数多くの鍼灸の理論書や教則本が出版された[2]。また、人体の経穴と経絡を図示した明堂図も、刷り物で数多く製作され、技術の教授に使われた[3]。また、木製や和紙の張子製の銅人形も、教具として用いられてきた。これら鍼

灸指南書、明堂図、木製・紙製銅人形[4]は、現在も各地の博物館等に保管されている。

これに対し銅合金を素材として用いて製作された銅人形は、当時の人体に対する知識の粋を極めたものであった。我が国で製作された銅人形のなかでもっとも有名な資料は、東京国立博物館蔵の二体の銅人形であり、一体は国の重要文化財に指定[5]されている（以下、重文「銅人形」）。また、ドイツのハンブルク民族学博物館には、これと極めてよく似た銅人形が保管されている（以下、ハンブルク民博「銅人形」）。重文「銅人形」とハンブルグ民博「銅人形」は、経絡・経穴のみならず精巧に模造した木製の五臓六腑や骨格も付属する。

東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」と、ハンブルク民博「銅人形」には、共通点がある。ともに飯村玄齋という人物が考案したと記されていることである。本稿は、この飯村玄齋をはじめ、銅人形製作にかかわった紀州藩の士籍医師について追跡する研究ノートである。



重要文化財「銅人形」
東京国立博物館所蔵　Image：TNM Archives

また、近代に入ってそれが展覧会、博物館といった近代のメディアによって一般の人々の目にさらされていく過程の資料も紹介する。

第一章　現存する銅人形の来歴

第一節　東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」

＊附資料について

東京国立博物館には二体の銅人形が所蔵されている。うち一体は重文に指定されており、日本の彫刻史のなかでも極めてユニークな資料として知られている。この資料の来歴を示す資料は多くないが、銅人形本体の足の裏に記された銘と附（つけたり）の文書と箱書きによっていくらかのことをうかがい知ることができる。

附の文書は、銅人形に認められる銘について記している。

考　飯村玄齋　秋田古菴　工　岩田傳兵衛　鋳　又三郎　寛
文三年壬寅十二月吉日成
右者寛政九年巳七月廿三日公儀御醫師山崎宗雲殿拝見被仰付
候ニ付損候所有之馬具師村上九兵衛前日繕被仰付候節相改候
處胴人形左右之足之裏二認メ有之候

すなわち、一七九七（寛政九）年、幕府の医師山崎宗運が、銅人形を拝見したいというので、壊れた部分を馬具師村上九兵衛に修理をさせた。その折、銅人形の両足の裏に記された銘を見つけ、これを記したという。この文書が作成されたのは、山崎宗雲が銅人形を見分した翌日の「寛政九年巳七月廿四日」とある。

この文書は、いくつかの点で興味深い。

ひとつめは、製作に関わった人物の名を知ることができる点である。その内容は「考　飯村玄齋　秋田古庵　工　岩田傳兵衛　鋳　又三郎」である。つまり、設計者にあたるのが飯村玄齋と秋田古庵、施工が岩田傳兵衛、銅製部品の鋳造を行った又三郎であることがわかる。このうち飯村玄齋と岩田傳兵衛は紀州藩の銅人形製作において重要な名前である。後に詳細に述べるが、飯村玄齋家は紀州藩の由緒ある鍼灸の医家であった。初代は、紀州藩の初代藩主頼宣とともに紀州入りした。三代目飯村玄齋栄顕は、この銅人形製作で経絡・経穴を監修し、その考案に主体的な役割を果たした。秋田古庵は紀州藩士ではなく、どういう人物かは不明である。

二つ目は製作年代がわかる点である。「寛文三年壬寅十二月吉日成」とあり、一六六三（寛文三）年は、本資料が江戸時代前期の作、紀州徳川家の祖である頼宣が藩主であった時期に製作されたことを記している。ただし、この記述は寛文三年に製作されたことを示す銘を、製作年から一三四年後の一七九七（寛政九）年に発見して記録したという記述であるという留保はつく。また、寛文三年の干支は癸卯であり、銘にある壬寅はその前年一六六二年である。この矛盾をどう理解するかも問題である。

三つ目は、破損部分を馬具師の村上九兵衛が修理している点である。銅人形の修理をなぜ馬具師が行うのであろうか。後に述べるように、紀州藩における銅人形製作は、一七世紀中葉の一五年間に集中的に行われている。幕府の医師山崎宗運に見せるために修理したとする一七九七年には銅人形を製作できる人材がいなかったために、立体造形物の細工物に長けた馬具師が依頼されたのであろうか。ともかく、一八世紀末には紀州藩にはそれを製作する人材はなかった。

四つ目に、この修理そのものが、幕府医師が閲覧を申し出たことに応じるためであった点である。それまで一三〇年あまりの期間、銅人形は人目に曝される機会が少なく、経絡・経穴の教育目的で製作されたはずの銅人形が、実際には使われることなく収蔵されていたかもしれない。加えて、一七九七（寛政七）年になって、わざわざこれを見るために幕府から医師が紀州入りしている理由についても考える必要がある。注意しておきたいことは、一七世紀末のこの時期は、紀州藩第一〇代藩主治宝（はるとみ）の治世である点である。治宝は、文化・芸術・学問を奨励し、御庭焼を設置して茶器を焼き、楽をたしなみ雅楽の名器や文献を収集したことで知られている（国立歴史民俗博物館所蔵「紀州徳川家伝来楽器コレクション」）。治宝の時代、藩の所有する古い文物や古玩に対する価値が再評価されていった時期であった。治宝が和歌山城下に医学館を設置したことから考えても、幕府医師の視察による銅人形は決して偶然的な出来事ではなく、銅人形〝再発

見〟の時代的背景として気にとめておく必要があろう。

最後に、この修理の契機を作ったのが幕府医師山崎宗雲である点である。この人物の詳細については筆者は調べ切れていない。しかし、山崎宗雲は東京国立博物館が所蔵するもう一体の銅人形の監修者とされている。東京国立博物館の展覧会解説では、「一八世紀後半、幕府の侍医山崎宗雲（一七六一～一八三五）は『銅人腧穴鍼灸図経』を校訂・注釈し、その研究成果をもとに等身大の「銅人」を銅で鋳造した。全身に三六〇の経穴があり、もとは中国の宋代に医師国家試験に使用された。明治一〇年に内務省博物局に移管された。」（東京国立博物館二〇一一）とある。その根拠となる資料を筆者は見ていない。この資料の来歴については、元東京国立博物館東洋課長の佐藤昭夫が著書で次のように述べている。「一応わかっていることというと、幕府が経営していた江戸医学館に所蔵されていたのを、明治十年ごろ、博物館の準備のための博物局に移管されたものであることぐらいである。」（佐藤一九八一、一三四頁）もしこの銅人形が山崎宗雲の作であれば、宗雲による重文「銅人形」の閲覧は、それを製作するための参考とすることが目的であったのだろうか。

次に、この銅人形の来歴を示す資料に、附の箱書きがある。この箱書きには「旧伊豫西條藩主　松平頼英寄贈」とある。この記述から、銅人形が旧西条藩の所有物であったことと、旧とあるので廃藩置県以降に国に寄贈されたことの二つがわかる。その西条藩は紀州藩支藩である。前者について、西条藩へどのような経緯で紀州藩からもたらされたかは不明である。後者について、松平頼英は西条藩最後の藩主としてその時期は一八六二（文久二）年～一八七一（明治四）年である。西条藩は明治新政府側について官軍として戊辰戦争に加わり、最後の藩主松平頼英は知事となり、のちに子爵に叙されている。何かの契機に、ある意図をもって、藩の旧蔵品が国に寄贈されたのであるが、その経緯を示す資料は筆者が西条市で行った調査では見つけることができなかった。

＊実物資料の所見について

東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」の熟覧は、筆者に許可されなかった。そのかわり特別陳列「健康を考える」（平成二三年八月三〇日～一〇月一〇日）にて展示場に陳列された際、展示場内でガラスケース越しに調査することのみを許された。この資料の観察によるいくつかの所見をここで述べる。

まず、全身が網目のように透かした銅の素材でできていることはわかるが、詳細に見てみると、銅を六角形の亀甲紋を並べたようなパターンで抜いて作られた板を、立体に組んでいることがわかる。体部全体は、六区に分けて鋳造していると『図版目録　日本彫刻篇』（東京国立博物館編一九九九）は記している。これをどのような技法で製作するのかは不明である。また表面は平滑ではなく、波打った凹凸が全体に見られる。耳・瞼・唇・乳首・男性器・手足の爪は銅合金で作った別の部品が付けられ、眉毛は動物の毛を移植している。全体としては、細身の男性老人として造形されている。全身に張り巡らされた五色の経絡は、薄い板状のテープのようなものを貼り付けられており、通過する経穴は赤色

で着色されている。金属に対し、どんな顔料と技法を用いて着色しているかはよくわからないが、多色の顔料を表面に塗布していることは目視で確認できた。また、胸板、背中、首筋部分は、体の表面の網目板を外せるようになっており、持ち手となる小さな輪金具も装着されている。内臓は木製で五臓六腑と骨が着色されて文字通り内蔵されている。

加えて、大きな破損個所がみられる。まず足の甲の上から足首にかけて両足とも屈折した痕跡があり、破損個所は修理されていない。また右腕から肩にかけて部品が曲がっており、裏側には太い銅線による雑な修復痕も認められる。右上腕部分は部品が大きく欠損しており、あるいは右腕はこの修復した銅線のみで接続している状態かもしれない。右腕の肘が不自然に外側に張っているのは、本来は腕はもう少し手のひらを前方に見せるような角度でついていたことを窺わせる。体全体も前傾しており、胴部は土台に固定された支柱に、二本の革紐のような太い紐と一本の銅線で結び付けられている。これら破損部分を総合して考えると、おそらくこの銅人形は一度、立った状態から右前に向かって倒れて破損している。両足首の破損は、足がある程度固定された状態から体が前屈したことを示しており、その破損は特に左足部がひどい。これがいつの時点の破損事故なのかはわからない。どの部分が一七九七年に修復された修復か所で、どの部分がそうでないかを知る手掛かりはないが、右腕を留めている銅線や背中に固定している革紐は、近世まで遡るものではないように見える。ちなみに土台は木製で、下をのぞくと木製の車輪が四つ装着されている。かつては銅人形を支柱に固定したまま後ろから押して運搬することができたようである。

第二節　ハンブルク民族学博物館所蔵の銅人形

ハンブルク民博「銅人形」の足裏には「飯村玄齋考　寛文九年己酉歳三月吉日成」とある。

飯村玄齋の監修であることから東京国立博物館所蔵の重文の銅人形と同様の背景をもつことがわかり、製作年は一六六九（寛文九）年と重文「銅人形」の六年後である。紀州藩徳川家初代藩主頼宣はこの年五月に隠居するが、三月はまだ在任中であり、これで重文「銅人形」とあわせて二体の銅人形が頼宣の治世に製作されたことがわかる。ただ、この資料がどういった経緯でこの博物館に所蔵されるに至ったかは不明である。現在この資料は、非常に繊細な作りであることから展示には供されておらず、熟覧も叶わなかった。

筆者の現地調査では、ドイツには医学史関係のコレクションが相当な規模で存在することが明らかである。二〇世紀初頭に開催された衛生博覧会等では、日本を含む東洋医学の文物も陳列され、一部は現在もドイツ国内の博物館に収蔵されている。[6] また、あるいは近代のある時点で、骨董商を通じて医療関係の資料が日本から持ち出された可能性もある。この資料の来歴については、今後のヨーロッパの日本学の研究成果等に期待したい。

第二章　銅人形製作に関わった人物

第一節　飯村玄齋

飯村玄齋の史料上の初出は、前掲の東京国立博物館所蔵の銅人形の銘（一六六九年）であり、それを書き写した附文書は前述のとおり一七九七（寛政七）年に書かれた。そして次がハンブルク民族学博物館所蔵の銅人形の銘（一六六九年）である。飯村玄齋が存命中に名を書き残した資料はこれらのみである。

紙資料に記された飯村玄齋の名の初出として、紀州藩が作成した藩史である『南紀徳川史』に、紀州徳川家初代頼宣が紀州入りした時の家臣一覧を記した部分に飯村玄齋の名が見える。(7) また、「四拾石　飯村氏　玄齋　子孫又新　南龍院様仕六拾石か光貞卿御代蒙御勘役御免其子又新京都浪人仕其子又新被召出」とある。

飯村家の詳細についてより明らかにするため、筆者は『紀州家中系譜並ニ親類書書上』を和歌山県立文書館で調査した。これは、幕末に紀州藩士の各家の系譜と親類を報告させたもので、家によっては詳細な系図が残っている。和歌山県立文書館でマイクロフィルムとそのコピーが閲覧でき、このなかに一八四八（嘉永元）年に「小普請御医師　飯村玄齋栄照」が提出した「系譜」がある。ここには、飯村家の歴代の簡単なプロフィールが記されている。

重文「銅人形」およびハンブルク民博「銅人形」の製作紀年銘と、「系譜」上の人物を照合すると、その製作に関与していたのは三代目飯村玄齋栄顕ということになる。その記載によると、銅人形製作においての飯村玄齋の役割は経絡・経穴の監修者であったことが記されている。「御好之銅人形乃儀付経絡愈穴之儀委細吟味仕仕立差上申候　右ニ付御加増五石被下置候」とあるように、銅人形製作は藩命で行われ、その成果によって飯村玄齋家は加増された。飯村玄齋栄顕が銅人形を製作したのは、跡目を継いでから奥の医師となるまでの一六六〇年～一六七一年の間である。飯村玄齋監修の銅人形は、東京国立博物館所蔵が一六六三年、ハンブルク民族学博物館所蔵が一六六九年であるから、二体についての記述があってしかるべきだが、ここでの銅人形についての記述は一体に対してのみである。銅人形製作についてここでは「年月不知」としているので、「系譜」に記述された銅人形が、重文「銅人形」およびハンブルク民博「銅人形」のどちらについて述べているのかはわからない。

以下、各代の飯村玄齋について簡単にまとめる。

初代目　飯村玄齋栄就

・越中の生まれで、天正年間に徳川家康に「御針医」として四十五石で召抱えられ、関ケ原合戦時にも同行した。紀州藩初代藩主頼宣（家康の十男）とともに紀州に入り、以後藩医として勤め、一六二九（寛永六）年に病死した。

二代目　飯村玄齋栄之

・山城の生まれで、初代藩主頼宣の代に、父玄齋の跡目を受け、四十五石取りの表御殿の「御針医」を勤めた。一六六〇（万治三）年に病死した。

三代目　飯村玄齋栄顕

・紀伊の生まれで、初代藩主頼宣の代の一六六〇（万治三）年に、父の跡目を受け、四十五石取りの「御針医」を勤める。

・年は不明だが、藩命で銅人形の「経絡愈穴」（腧血＝背中の経穴）の「委細吟味」を申し付けられ、その功績によって五石の加増となった。

・二代藩主光貞の代の一六七一（寛文一一）年に、奥の医師となる。しかし「心得違」のため「御暇」を願い出て、それが「不届」であるとして改易させられる。

・将軍家光の「年回」の時、日向様（不明）が詫びてくれたことで、城下への出入りを再び許された。その後は「御用筋」の仕事には関わるが、召抱えられることなく、一六九九（元禄一二）年に病死した。

・その子又新は、浪人として一生を終える。

その後は、四代目飯村又新栄が、一七八一（天明元）年、再び「御針医」として召抱えられたのを機に、順調に扶持を増やす。文化十二（一八一五）年に病死した。六代目飯村玄齋栄照はこの系図が作成された一八四八（嘉永元）年の当代である。

ちなみに、『文久元　紀士坤』という史料がある。これは一八六一（文久元）年当時の紀州藩士の禄高を一覧した藩の記録であり、飯村玄齋は「寄合御医師」の役職で「十五石」取りとされている。「寄合御医師」のリーダー格の木下玄宅なる人物が「百五拾石」取りであるから、禄高はその十分の一にすぎず、下級の医師であった。この飯村玄齋は、生年から六代目飯村玄齋栄照とわかる。

これらの史料から、飯村家は家康以来の由緒ある医家であり、紀州藩の初代藩主とともに紀州入りした名家であった。初代から鍼灸師として活躍し、代々その職業を受け継いでいった。その三代目の飯村玄齋栄顕は、藩のプロジェクトであった銅人形製作で経絡・経穴をひいてその企画に主体的な役割を果たしたと思われ、伝世する二体の銅人形に「考」すなわち監修者として銘を残した。この時期は、飯村玄齋自身にとっても、飯村玄齋家にとってもの絶頂期であった。その後飯村玄齋栄顕は、その後何らかのトラブルで藩医の職を退くことになる。その理由は含みのある表現で書かれているがわからない。辞したのは玄齋自身の意思であったようであるが、最終的には改易という懲罰的な扱いを受ける結果となった。

飯村玄齋栄顕の子らは浪人として不遇な生活を送るが、四代目以降は再び紀州藩に召抱えられ、養子を得たりしながら家としての医術の水準を高めようとした。しかしその地位は決して高まったとは言えず、藩士やその家族を診療したり、医学館（言わば藩の大学病院）に関わったりしながら明治を迎え、紀州藩の消滅後の飯村玄齋家の消息については不明である。

第二節　岩田道雪

東京国立博物館所蔵の銅人形の銘と附文書に、銅人形の製作者としての「工」にたずさわった人物として岩田伝兵衛が挙げられ

ている。「考」にたずさわった飯村玄齋とともに重要な人物のひとりであるが、今回の調査では岩田傳兵衛という名前を藩制史料その他から見つけ出すことはできなかった。

ここで注目したいのが東京大学医学部所蔵（医学部標本室保管）の紙塑製「胴人形」の製作者とされている岩田道雪という人物である。その岩田道雪については、前掲の『紀州家中系譜並ニ親類書書上』に六代目飯村玄齋栄照と同じ役職の「小普請御医師」の岩田玄仙が一八〇七（文化四）年に提出した、岩田家の系譜が含まれている。ここには、東大医学部所蔵の「胴人形」の製作者とされる岩田道雪の名と、銅人形に関する記述を発見することができた。

それによると岩田家初代、岩田道雪重信は、山城の生まれで、紀伊徳川家初代藩主頼宣に四十五石で召抱えられ、頼宣の紀州入りに同行して士席医師となった。一六七七（延宝五）年に八十五歳で病死したとあるので、逆算すると一五九一年の生まれとなる。銅人形については以下の記述がある。

承應三甲午年月日不知銅人形弐ツ兪穴奇経八脈之経引候被仰付候無故障相勤差上候処格別二御誉頂戴仕銅人形壱ツ並銀時服拝領仕候右銅人形代々持伝罷在候

そして一六五四（承応三）年、藩命によって銅人形二体の「兪穴奇経八脈之経」を引いた。これにより銅人形一体と褒賞金を拝領したとある。そして、その銅人形は岩田家に代々保管されてきたとある。この記述には三体の銅人形が登場する。二体は一六五四年に岩田道雪自身が製作にたずさわった銅人形で、それらは藩の所有物となったはずである。もう一体は、二体の銅人形を製作した褒美として藩より下賜された銅人形である。すなわち、岩田道雪が製作する以前に、紀州藩はすでに銅人形を少なくとも一体持っていたということである。これ以前に、紀州藩で銅人形を製作した記述はないので、日本で作られたものではない可能性もある。

東大医学部が持っている来歴情報では、東大の胴人形は、中国からもたらされた模型をもとに一六六〇（万治三）年に岩田道雪が製作したとされており、道雪が紀州藩から下賜された銅人形をもとに製作した可能も否定できない。その後、一六六三年には重文「銅人形」が製作され、「工」として岩田傳兵衛の名が残る。しかし、この岩田家の系譜には、傳兵衛は見られないが、本人もしくはそう遠くない家系の者であろう。

第三節　秋田古庵

紀州藩士・藩医その他、藩に召抱えられていた全ての秋田家の『系譜』を調べたが、古庵という名前を持つ、あるいはこれを号した人物は見られなかった。秋田姓の諸家のなかで医術関係にたずさわった者はいなかった。そのため重文「銅人形」の飯村玄齋との共同監修者である秋田古庵は、紀州藩医でない可能性が高い。

第三章　紀州藩で製作された銅人形

ここまで、現存する紀州藩製作の銅人形と、その製作に携わった人物の経歴についてのべてきた。そのなかで複数の銅人形についての記述があったが、表はそれを集約したものである。

まず文献上では、紀州藩は都合六体の銅人形を製作したことがわかる。このうち、岩田家の系譜にあらわれるA・B・Cは現存が確認できない銅人形である。Dは東京大学医学部所蔵の銅人形であり、来歴情報についてはより詳細に検討する必要がある。E・Fは現存する二体の銅人形で、一点は東京国立博物館所蔵、もう一点はハンブルク民族学博物館所蔵である。飯村家の系譜にあらわれるのはそのどちらかである。

人形	製作年	内容
銅人形A	一六五四年	初代岩田道雪重信が、藩命により製作に関わった二つの銅人形のうちのひとつ。
銅人形B	一六五四年	初代岩田道雪重信が、藩命により製作に関わった二つの銅人形のうちAでないもの。
銅人形C	一六五四年以前	A・Bの銅人形製作の褒美として、初代岩田道雪重信に下賜された旧紀州藩所蔵の銅人形。一八〇七（文化四）年時点で岩田家に伝来。
銅人形D	一六六〇年？	東京大学医学部に所蔵されている「胴人形」。紀州藩から下賜された銅人形をもとに岩田道雪重信が紙塑で製作されたと思われる人形。
銅人形E	一六六三年	東京国立博物館に所蔵されている重文「銅人形」。「考」三代目飯村玄齋栄顕・秋田古庵・「工」岩田伝兵衛・「鋳」又三郎によって製作され、一七九七年に幕府医師に見せるため馬具師が修理し、西條藩主松平頼英が所有し、何かの経緯で国に寄贈された。
銅人形F	一六六九年	ハンブルク民族学博物館に収蔵されている銅人形。三代目飯村玄齋栄顕が「考」と銘がある。一九二九（昭和四）年に寄贈されたとされる（長野二〇〇一）。

四章　展示される銅人形

東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」は、何かの契機で国に寄贈され、大正期には東京帝室博物館（現東京国立博物館）の所蔵品となっていた。この時期はまだ「銅人形」は文化財指定されておらず、歴史資料の珍品といった程度の評価であったろう。この銅人形が外部の展覧会に出陳されたことがわかる資料がある。『第六回極東熱帯医學会附帯展覧會　日本医學歴史資料目録』[8]である。

極東熱帯医学会は、大正期に活躍した寄生虫学者吉田貞雄の説明によれば以下のようなものであった。「本会の由来は遠く一九〇八年にその端緒を現わしている。当時、東洋諸邦の医学者間に国際的に門戸開放を唱え、諸国協力して医学の進歩を計り、東洋より病魔の駆逐を企てんとの議が起った。この意見が益々盛になり、遂に国際的連合医学会設立の必要を見る様になって、本会が創設されたのである。」そして、その大会は、第一回（一九一〇年）マニラ、第二回（一九一二年）香港、第三回（一九一三年）サイゴン、第四回（一九二一年）ハワイ、第五回（一九二三年）

シンガポール、第六回（一九二五年）東京、第七回（一九二七年）カルカッタ、第八回（一九三〇年）バンコク、第九回（一九三四年）南京と開催された。

銅人形が展示されたのは、この第六回の東京大会にあたって開催された展覧会である。その学会の規模と概要を伝える数少ない資料として、「極東衛生会議を愈よ日本で」と見出しが付けられた新聞記事がある。

極東衛生会議を愈よ日本で　東洋の権威二十余氏が明年九月二週間に亘って

国際連盟に於いては来年九月から約二週間に亘って東洋衛生技術官交換視察会及び第六回熱帯病学会の極東大会を我が日本に於て開催する事に決定し内務省でも之れが接待費として六千円を明年度予算に計上した、此の大会は我国では最初の国際会議で参加者の顔触れはオーストラリア、インド、フイリッピン、支那等の東洋各国の代表者二十余名で其の中には世界的の脚気研究者として知られているオーストラリアのソーヤー氏、インドの寄生虫学の大家ランゲン氏も居る滞在中は日本に於ける主要都市の医科大学病院等の衛生的設備行政の実地視察をなし、又意見の交換を行うが、極東医学界の重大なる問題となって居る東洋特有の、脚気と白米の関係と、まちまちになっている検疫法の統一などは当然此の大会の重要なる議題となるらしい、我が国の関係者はいまから既に諸般の準備中であるが大会費は十万円の予算である、尚此の会を期して我が国の熱帯病学会を極東熱帯病学会と改称し北里柴三郎博士が会頭に長与又郎博士が副会頭に正式に推される筈である。

（国民新聞　一九二四（大正一三）年一一月二九日付）

目録の序の日付から、展覧会は大正一四年一〇月から開催されたようである。目録によると、展覧会部長を宮島幹之助が、監修を富士川游・呉秀三が務めた。宮島は、米沢出身の寄生虫学者、国際連盟保健機関常設委員帝国代表委員等、富士川は広島県出身の医学者で『日本医学史』の著者、趣味家としても知られる、呉秀三は広島県出身の精神科医、東京帝国大学名誉教授である。本書で、呉は展覧会について次のように記している。

本展覧は、日本醫學の発展と、それの西洋醫學並に支那醫學との交渉を、年代を追ひ又一部は科目を分けて、一目の下に瞭然たらしめんことを目的としたり。而して其年代に就きては、明治革新を以てその終りとし、その圖書は凡てその代表的のものゝみを選びたり。

展覧会は、総展示点数三〇九点という大規模なもので、これだけの展覧会は博物館全盛の今日でもありえないほど充実した内容である。展示の構成は以下のようなものであった。展示点数は目録に掲載されている資料を数えて記している。

第一　古代より室町末に至るまで醫學一般に關して　五三点
第二　醫學の各分野に關して
一　解剖学　三四点
二　産科　一二点
三　外科　四二点
（い　支那の外科書の一つ　一点、ろ　南蠻流及和蘭流外科の書物　二〇点、は　華岡流の外科　一〇点、に　近世の西洋外科の書　一一点）
四　繃帯學及び整形外科　五点
五　鍼灸科　八点
六　薬物學　二〇点
（い　支那の書物　四点、ろ　日本の書物　七点、は特に治療に關する意味に於て　三点、に　西洋學の直接影響を受けたる書物　六点）
七　内科學　一二点
（い　漢方醫の著書として（和蘭醫學の影響あれど）一点、ろ　西洋醫方たる内科の書物　七点、は　漢方内科に於ける特殊の分域單行本　四点）
八　診斷學　一〇点
（い　漢方　六点、ろ　蘭法　四点）
九　治療學　一一点
（い　漢方醫家の治療學書　七点、ろ　蘭方醫家の治療方書　四点）
十　婦人科　四点
（い　漢方醫の婦人科著書　三点、ろ　西洋醫の婦人科著書　一点）
十一　小児科　二点
十二　眼科學　七点
十三　痘瘡學　一六点
（い　漢方醫學として痘瘡に關する著述　五点、ろ　漢蘭の種痘法　六点、は　除痘の宣傳　五点）
十四　黴毒學　三点
十五　軍陣醫學　四点
十六　法醫學　四点
十七　其他醫學に近接せる科学　一二点
十八　一般洋學に關して　一七点
第四　外人の部
一　ケンペル　六点
二　トゥーンベルグ　五点
三　シーボルト　一〇点
四　ポンペ　一点
第五　雜種　一一点

合計三〇九点

第三が抜けているのは何かの誤りであろうが、ともかくその内容の豊富さと規模に驚かされる。出陳者は、富士川、呉の私蔵書に加え、東京帝室博物館や帝国図書館、紀州徳川家当主徳川頼倫の私設図書館であった南葵文庫（現東京大学総合図書館蔵）、慶

應義塾、長崎県立図書館、東洋文庫などである。この展示の博物館史的意義については、今後考察を深めたい。

この日本医学界の威信をかけた展覧会に出品されたのが、現在も東京国立博物館に所蔵されている二体の銅人形である。目録の記述は以下のとおりである。

五　鍼灸科

支那より傳はり我日本に於て相當發達を遂げ、江戸幕府時代には此を官醫の一科とし、又一簾の學者ありたり。

一四七　銅人形

飯村玄庵　秋田古庵考案　製作年代　一六六三　一臺　東京帝室博物館出品

飯村・秋田二氏の考案に基き、岩田傳兵衛製作し、又三郎の鑄造せるものにして、一七九七年に山崎宗雲檢攷修覆したり。松平頼英よりの献品なり。

一四八　銅人形　製作年代　不詳　一臺　東京帝室博物館出品

右は元江戸幕府の醫學館にありたるものにして、支那より渡來せしものなりと傳ふ。

紀州藩で製作された銅人形は一四七の資料である。ここでは、飯村玄齋を「玄庵」と記し、山崎早雲自身が修復したような説明がなされるなど、前掲の附資料の記述内容の誤読がある。一四八の資料は、現在も東京国立博物館に所蔵されているもう一体の銅人形である。その来歴については、「支那より渡來せしものなりと傳ふ」とあるが、これは現在国産であるとされている（小曽戸一九九三）。この来歴について、佐藤昭夫は「話だけで根拠はなさそうだが、豊臣秀吉による朝鮮侵攻の際に加藤清正が持ち帰ったものだともいう。こういうものになると朝鮮征伐、人物というと加藤清正というのが、きまり文句になっているらしいが、果たしてほんとうだろうか。」というエピソードを紹介している。中国や朝鮮に起源を求めることは、この資料の権威づけのための方便であったと思われるが、実際のところは医学館から明治政府の博物局に移管されたということしかわからない。

ちなみに博物局について触れておく。明治政府が設置した二つの組織、すなわち「古器旧物」を保存しそれによって歴史を明らかにするとの観点から物を扱う文部省博物局と、勧業政策のための素材として物を扱う博覧会事務局は、一八七三（明治六）年に前者が後者に合併されるかたちで、一八七六（明治九）年内務省博物局が設置された。江戸幕府の医学館が所有していた銅人形は明治一〇年に移管されているから、設置間もない博物局に移管されたことになる。その後博物局は、一八八一（明治一四）年に農商務省に移管され、「古器旧物」は本格的に勧業政策の文脈で扱われることになった。こうした動向を考えると、この銅人形がこうした展覧会という近代のメディアで陳列されるのは、これが初めてではなかったのではないか。

極東熱帯医学会の展覧会は、西洋医学の分類のなかに漢方医学の資料を位置づけ、日本の医学の伝統を漢方と西洋医学との融合

の歴史として描くところに特色がある。展覧会の出品目録からは、展示資料のほとんどは古書籍と医術の道具であった。そのなかで、等身大の銅人形は衆人の注目するところであったろう。

まとめ

本稿で明らかにしえたことをまとめる。第一に紀州藩は一七世紀中葉の一五年間に、合計六体の銅人形を集中的に製作し、その後は製作しなくなったこと。重文「銅人形」の監修者である飯村玄齋は、三代目飯村玄齋栄顕であり、彼は二体の銅人形（東博所蔵とハンブルク民博所蔵）を監修したこと。飯村玄齋栄顕は銅人形を監修して昇進し、何らかの理由で失脚したが一定の名誉回復がなされたという浮き沈みの激しい人生を歩んだこと。銅人形製作から一三〇年あまりたって、幕府医師山崎宗雲が閲覧を申し出て、その折に馬具師によって修復がなされたこと。その山崎は、別の銅人形を監修し、結果的に紀州藩の銅人形と山崎が製作した幕府医学館の銅人形はともに別経由で国に寄贈され、東京国立博物館所蔵となっていること。そして大正末期に開催されたアジア地域の国際的医学会の大会が日本で開催されたときに、この二つの銅人形が出陳されたこと、などである。

本稿では、紀州藩における銅人形製作について明らかにしうる史料の紹介をしながら、銅人形の来歴、その監修を行った人物、そして近代における銅人形の展示について、その断片を述べてきた。筆者は経絡・経穴についての知識が無いため、医学的知識の観点からの考証はできない。また、現存する実物資料が重要文化財に指定されていたり、海外に所蔵されていたりと、それらを熟覧することが困難であり、工芸技術的な検討もできない。現在のところ可能なことは、文字に記された史料とその背景を考察することのみであり、総合的な研究の体制は未だ整わない。筆者は当初、医学史的考察と工芸史的考察の総合化を、文献と実物資料とそれらについて記したいわば二次資料の横断的活用によって達成しようとしたが、それの準備にはもう少し時間が必要であった。

ただ、史料検討の過程で、例えば近代における展示にかんする資料は、銅人形製作の観点からは二次資料であっても、その来歴という意味では一次資料として位置付けて検討することによって、モノへのまなざしの一端を知ることができると感じた。今後はこうした視点で史料渉猟をおこなって準備しながら、総合的な調査が可能となる契機や機運を待ちたい。

註

（1）加藤幸治　二〇一一『郷土玩具の新解釈―無意識の〝郷愁〟はなぜ生まれたか―』社会評論社、同　二〇一二『紀伊半島の民俗誌―技術と道具の物質文化論―』社会評論社

（2）鍼灸の教科書は、宋代に王惟一がさまざまな流派を統合して編さんした『銅人腧穴鍼灸図経』を基礎に作られてきた。江戸時代に鍼灸術の指南書として使われたのは、中国における医術の古典のひとつである滑寿による『十四経発揮』（一三四一年）をもとにした数多くの出版物で、「新刊十四経絡発揮」寛永八年、「経穴彙解」文化四年、「十四経絡発揮和解」

元禄六年など多数ある。

（3）明堂とは、中国古代における政治、儀礼、祭祀、教育の中心的な施設の名称で、それは独自の宇宙観にもとづいて説明されることから、星座の名前や人間の経穴の部位などをさす言葉となった。したがって、経絡・経穴を示した人体図も明堂図と呼ばれるようになり、人を仰向けにした状態の正人明堂図、うつ伏せにした状態の伏人明堂図、人体を横から見た側人明堂図、各部位ごとの明堂図が作られるようになった。

（4）木製・張子製・紙塑製の人体模型も、銅人形と呼ばれたことが『和漢三才図会』などからわかる。伝世する資料は、同じ音から胴人形と呼ぶ場合も多い。胴人形の語は、広義には等身大の人形一般、まれに性愛玩用の人形をさす場合もある。

（5）二〇〇五年六月九日指定。重要文化財「銅人形」、東京国立博物館所蔵、列品番号C―五四四。東京国立博物館編一九九九によれば、像高一四三・四センチメートル、外形は銅製鋳造（六区に分けて鋳造、表面を籠目状に透かす）、玉眼、内臓は木製彩色。

（6）海外の民族学標本を含むものとして、例えば一九一一年にドレスデンで開催された万国博覧会の出品資料とその後設立された衛生博物館の所蔵品が、ドレスデン民族学博物館に所蔵されている。また他に、ベルリン医学史博物館の解剖学・病理解剖関係資料、ベルリンのフンボルト博物館（通称：自然史博物館）などもある。

（7）堀内信編『南紀徳川史』第八巻、名著出版、一九七一年を参照した。

（8）筆者所蔵の一次資料を参照した。

参考文献

京都国立博物館監修　一九五五『医学に関する古美術聚英』便利堂
近藤雅樹編　二〇〇六『一九世紀における日本在外博物学・民族学標本コレクションの実態調査』科研費特定領域研究にかかる計画研究報告書
小曽戸洋　一九九三「東博銅人形の製作者および年代について」『医道の日本』第五二巻第七号　医道の日本社
佐藤昭夫　一九八一『仏像ここだけの話』玉川大学出版部
東京国立博物館編　一九九九『図版目録　日本彫刻篇』同館
東京国立博物館　二〇一一　特別陳列解説シート「健康を考える」同館
長野　仁　二〇〇一「寛文九年成・飯村玄齋考「銅人形」覚書（上・中・下）」『鍼灸OSAKA』第一七巻第二・三・四号
はりきゅうミュージアム編　二〇〇一『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』森ノ宮医療学園
吉田貞雄　一九六五「寄生虫学遍路（二〇　中国遍歴）」『目黒寄生虫館月報』第八一・八二号
Josef Kreiner.ed 2003 *Japanese collection in European museum*, Bier'sche Verlagsanstalt

【付記】本稿は文部科学省科学研究費（若手研究B）平成二十三～二十四年度「日本における銅人形製作の医学史・工芸史の研究」（研究代表者　東北学院大学文学部　加藤幸治）による研究成果の一部である。